

二〇三三年二月一七日

雪吊の波打つてをる水鏡

かえる

ぼけ封じ詣で要らぬと日向ぼこ

もとこ

紅葉散る御寺の庭の静寂かな

うつぎ

幾重にも枝さし交はす峪紅葉

こすもす

象嵌のごと木の実敷く石畳

むべ

湖涸れて島へ繋がる道現るる

隆松

オリオンもスイングしたる野外フェス

素秀

朱の欄に触れてかつ散る寺紅葉

よう子

石仏の苔の裳裾に散紅葉

うつぎ

小柴垣囲ひの茶寮竹の春

わかば

橋半ばのぞく底ひの溪紅葉

ぼんこ

石仏の頬ゆるむやに冬日燦

小袖

苔庭にしるき網目や枯木影

康子

小柴垣囲ひの茶寮竹の春

わかば

箒目のさざ波に散る庭紅葉

あひる

石仏の頬ゆるむやに冬日燦

小袖

湧水の岩場を綴る石露の花

康子

石仏の頬ゆるむやに冬日燦

小袖

茶寮なる玻璃戸に歪む紅葉影

よう子

石仏の頬ゆるむやに冬日燦

小袖

御寺なる名に負ふ庭の散紅葉

せいじ

石仏の頬ゆるむやに冬日燦

小袖

持ち帰り遺影に手向く散紅葉

たか子

石仏の頬ゆるむやに冬日燦

小袖

暖炉の火サルサ踊りをしてやまず

素秀

石仏の頬ゆるむやに冬日燦

小袖

愉しくてやがて寂しき忘年会

わかば

石仏の頬ゆるむやに冬日燦

小袖

おしやべりの止まぬ小春の吟行子

澄子

石仏の頬ゆるむやに冬日燦

小袖

二〇三三年二月一七日

吟行句会みの選